

第二日 六月三日(日) 受付9時00分 國學院大學渋谷キャンパス二〇周年記念二号館三階

研究発表会

午前の部 (9時30分～11時40分)

A会場 (二〇周年記念二号館三〇二教室)

大塚楠緒子の『露』が語った〈幸せ〉——学問する明治女学生のあり方

発表者/名古屋大学大学院生

司会/早稲田大学教授

藤原 耕作

韓 韓

石原 千秋

「雑兵」の一箭—山田美妙『夏木立』と批評家内田不知庵の登場

発表者/早稲田大学大学院生

司会/和洋女子大学助教

大貫 俊彦

佐藤 淳一

三ヶ島菫子の女教師時代

発表者/昭和女子大学特別研究員

司会/鶴見大学短期大学部教授

高橋 美織

山田 吉朗

B会場 (二〇周年記念二号館三〇三教室)

コモンセンス・ペアレンティングと表現指導——言語学的視点からの再検討——

発表者/秀明大学助教

司会/和洋女子大学助教

原 國人

市原 乃奈

岩下 裕一

西行と鏡の歌—「人の心のうち」を捉えること—

発表者/國學院大學兼任講師

司会/前東京大学教授

荒木 優也

三角 洋一

『古今和歌六帖』萬葉歌の再評価

発表者/東洋大学大学院生

司会/國學院大學兼任講師

池原 陽斉

城崎 陽子

昼食・休憩 (11時40分～12時40分) 二〇周年記念二号館三〇一教室

午後の部 (12時40分～15時35分)

A会場 (二〇周年記念二号館三〇二教室)

謝六逸の記した平安朝と物語文学

総合司会/本学会常任委員・大分大学准教授

発表者/明治大学兼任講師

司会/跡見女子大学名誉教授
放送大学客員教授

西野入篤男

神野藤昭夫

母に添臥す落葉の宮

発表者/國學院大學兼任講師

司会/大阪樟蔭女子大学教授

津島 昭宏

中 周子

『伊勢物語』「うつのやまへ」のストラテジー

発表者/二松學舎大学准教授

司会/広島大学教授

原 由来恵

妹尾 好信

B会場 (二〇周年記念二号館三〇三教室)

『古事記』の「三色の奇虫」の解釈

総合司会/本学会常任委員・中京大学教授

発表者/國學院大學兼任講師

司会/長崎大学教授

山崎かおり

勝俣 隆

『金剛般若経集験記』から見た『日本霊異記』

発表者／大東文化大学准教授
司会／同志社女子大学特任教授

山口 敦史
寺川眞知夫

古代における浦島伝説の位相―万葉集歌の水江浦島子を中心に―

発表者／苫小牧駒澤大学教授
司会／宮城学院女子大学名誉教授

林 晃平
犬飼 公之

小正月の炉端の行事とイザナキ・イザナミの神話

発表者／青山学院大学名誉教授
司会／成城大学教授

安田 尚道
山田 直巳

総会 (15時50分) 一二〇周年記念二号館二三〇三教室 (B会場)

授賞式 全国大学国語国文学会賞

文学・語学賞

研究発表奨励賞

閉会の辞

本大会実行委員長／本学会常任委員／國學院大學教授

辰巳 正明

貴重書展示

(國學院大學研究開発推進機構研究開発推進センター共催)

会場 國學院大學AMC棟地下一階展示室

展示期間 六月一日(金)～四日(月)

時間 10時00分～17時00分

平成二十四年度夏季

全国大学国語国文学会 第一〇五回大会 公開講演会

魂の記憶 ―文学はどのように語られたか―

中西 進

そもそも魂は、何を記憶しているのだろうか―そう問うてみると、わたしには、人間が何かを記憶する前に、土地が何かと交信し、それ自らに刷り込むことが先にあったはずだと思う。

この交信は、「自然」ということばによって現わされる己れを形成する。己れとは、何かによって培われた「もの」の格であろう。この、培われた「もの」は立ち上がって風景を構築する。現実を基にしていえば万象の幻風景とよんでもいい。その幻風景を記述するところに、文学が発生するのではないか。

現風景の記述が時系列的ならば、それは非時系の物だ。すなわち人間がもつ記憶の序列だろう。時系列を規準とする歴史に対して、普遍を事とする文学が誕生したのも、この時であったと思われる。

以後文学は非時系の、普遍の物語を、今日まで語りつづけてやまないものである。

【コーディネーター】

〈異国〉の〈モノ〉と文芸、そしてその表現と理念によるモダニズム

和洋女子大学教授 仁平 道明

シンポジウムの第二部・《パネルディスカッション「モダニズムの中の異国——古典文学の新研究——」》のテーマは、次のような視座から設定された。

第二部は、異国とモダニズムの問題を、古代・中古に起源を求めて文学のモダニズムを考えようとするものである。日本の古典期のモダニズムは、「カラ」から獲得した。そこには異国への限りない憧れと羨望があった。その起源はどのようなものであったのか。

そうした視座を起点として、近代におけるモダニズムの概念を日本の古典期に拡張、援用し、日本の古典文学、あるいは古典文学に描かれたものの中に見られる新しい展開の背景にあった〈カラ〉すなわち〈異国〉の存在を見すえ、その影響とそれによって形成されていった文学のあり方と内実を明らかにし、新たな展望を開いていくことが、このパネルディスカッションの目的である。

上代では、『萬葉集』の梅花の歌を例にとれば、〈漢〉の〈モノ〉であった〈梅〉の移入、そしてそれを素材とした詩文およびその表現の移入と影響によって、〈和〉の歌に新しい素材と表現が導入され、新しい展開が示されたこと、平安時代には、例えば『古今和歌集』において、従来指摘されてきた、『詩経』等の〈詩〉に関わるものだけではなく、〈歌〉がその中の一つに位置付けられる〈楽〉の意義・効用、その理念を説く中国資料の表現の援用によって、〈和歌〉のさらなる理念化がはかられ、それが以後の和歌観に多大の影響を与えていることなど、日本の古典文学において、〈異国〉の〈モノ〉と文芸、そしてその表現と理念の受容と影響から、〈モダニズム〉ともいふべき新たな展開が生まれた例は、枚挙に遑がない。

パネルディスカッションでは、上代、中古、そしてそこからつながっていく中世における文芸と〈モノ〉の背景にあった〈異国〉の移入と影響のあり方、それによって形成されたものの内実を明らかにし、さらには近代における古典文学の受容としての翻訳の背景にあった〈異国〉への視線についても考えていきたい。

平成二十四年度夏季

全国大学国語国文学会 第一〇五回大会

研究発表会 発表要旨

【パネリスト】

上代文学におけるモダニズム

—テキストとコンテキストにみる「庭園」—

國學院大學兼任講師 城崎 陽子

上代文学における「モダニズム」とは何か。「モダニズム」という用語を上代文学の範囲内で援用するならば、「近代性」とか「先進性」といった言葉に置換可能な概念であると考える。そして、これをテキスト、コンテキストを問わず具体化できるテーマとして「庭園」を掲げる。

上代における「庭園」は、考古学的な成果と共に、文学の「場」としても注目されてきた。推古紀にみられる園池の作庭記事をはじめとして、「権力の象徴」としての「島の宮」の記述や、神仙世界を具現化する園池の記述、君臣和楽を体現化する場としての平城京東院庭園や長屋王家庭園における文化的活動の記述など、上代文学のなかで「庭園」は様々な機能的側面を見せている。そして、「庭園」の機能面に対応する志向性の諸相は「庭園」の意義や大陸文化を摂取する様々な段階を示していたと考えられる。

京都における「庭園」が当時最新の「モダニズム」であったことは紛れもない事実であり、「庭園」の持つ「近代性」や「先進性」は文化的最先端であった。そして、ここに具現化される精神性は当時最高水準の文化の引き写しでもあった。同時に、そこで行われる儀式や文化的行事は、まさにそうした精神性を背景として持つ文化活動と捉えることができる。一方、ここに具現化される精神世界は時代の変化とともに日本化を計りつつ日本という風土に享受されていくこととなる。

上代文学に表現される「庭園」とそれが含み持つ文化活動をテキストから見出しながら、本シンポジウムの中心テーマとされる「モダニズムの中の異国」を「庭園」という具体例から読み取り、上代文学で言うところのモダニズム—「近代性」「先進性」が上代文学との相互関係をいかに構築していったかを考察する。そして、「庭園」を中軸とする文学世界が日本を含む東アジア世界の文化的縮図を内包していたことを述べる。

【パネリスト】

唐物をめぐる文化史 —『源氏物語』の和漢の位相—

東京学芸大学教授 河添 房江

『源氏物語』が成立した国風文化の時代は、遣唐使の時代以上に、アジアからの文物の輸入量が増大した時期であった。その現象を踏まえて、歴史学では榎本淳一らにより、新たな国風文化論が提唱されている。和風化したといわれる貴族生活が意外なほど唐物

(舶載品)で満たされており、文化上の和漢並立と融合が認められるのが、国風文化とよばれる時代であった。

かつての国風文化のキーワードは、かな文字の発達と遣唐使の廃止であり、鎖国のような環境で花開いた和風の文化という印象が拭えなかった。『源氏物語』もそうした国風文化観をまさに体現する文学作品と捉えられてきたのである。しかし遣唐使が中止されたからといって、海外の文物がシャットアウトされたわけではなく、むしろ国風文化は、唐物を消費するなかで生まれた洗練された都市文化であったといえる。そのことは、国風文化といわれる時代が和漢を内包し、それらが接触しながら成熟する時代であることを証している。

たとえば『源氏物語』の梅枝巻では、光源氏が娘の裳着の準備のため、唐物の香料を人々に分配し、薫物として回収している。それらの薫物に対して、異母弟の螢兵部卿宮は、黒方香は朝顔の姫君、侍従香は光源氏、梅花香は紫の上が素晴らしいと、それぞれ顔を立てるような判定を下した。しかも黒方香は「心にくく静やかなる匂ひ」、侍従香は「すぐれてなまめかしうなつかしき香」とされ、漢よりも和の美意識から評価されたのである。『うつほ物語』の香や薫物があくまで唐物らしい奢侈品として語られたのに対して、『源氏物語』では唐物を加工して「なつかし」といった気配をかもし出すという、いわば漢から和が再創造される様相がみられる。同じく梅枝巻の草子作りでも、唐・高麗・和の紙と書体の配合のひねりに、和漢を融和させる美意識がみとめられる。『源氏物語』の唐物をめぐる具体相は、国風文化とよばれる時代、ひいては唐物をめぐる日本文化史、和漢の相互関係を照らし返すさまざまな材料を提供していると思われる。

受けている。

しかし、平安時代と大きく異なるのは、少なくとも南北朝時代までは、実際にそれら作品に描かれた土地を、自分の目で見てきた人々が多かったこと、また実見するまではいかずとも、その土地を描いた絵画が広く普及していたこと、である。

その違いが作品の表現にどの程度関わってくるのかを探りつつ、日本漢文学におけるモダニズム的表現としての「異国」を考えてみたい。

【パネリスト】

『源氏物語』を「現代」に「移植」する

— (旧訳) から (新訳) へ、谷崎源氏転換のプロセス —

日本学術振興会特別研究員 大津 直子

現在そして今後へ向けた異国と古典文学との関わりについて、谷崎潤一郎の手がけた『源氏物語』訳、所謂谷崎源氏を対象に考えてみたい。谷崎によれば、谷崎源氏とは『源氏物語』を「現代」へ「移植」する「翻訳」である。ここに、欧米という新たな異国への視線が見て取れる。谷崎源氏は、異国の文学の受容行為である作家翻訳から始発した。いわば、千年の時間を隔てた異文化へ向けた国民の羨望を巧みにかき立てながら、激動の昭和史において金字塔を打ち立てたのである。

戦前の昭和十四年に刊行を開始した『潤一郎訳 源氏物語』(以下(旧訳))は、戦後の昭和二十六年以降に『潤一郎新訳 源氏物語』

【パネリスト】

名所としての中国 — 西湖を中心に —

慶應義塾大学教授 堀川 貴司

和歌において、地名の持つイメージ喚起力を歌枕(名所)という形で利用してきた歴史があるのと同様、日本漢文学においても、中国の地名を詠み込み、そこから連想されるさまざまなイメージによって表現を豊かにすることは、古くから行われてきた。

もともと漢詩には、中国の古い歴史のなかではぐくまれてきた典故表現がある。それは経書や史書に記された歴史的な出来事や有名な人物の言動を利用して、その知・情・意にわたる意義づけを作品に取り込むという方法であり、地名についても、それが大事件の舞台になったり、人物と深く関わったりした場合には、典故表現の一部として用いられた。

平安時代に入って、『白氏文集』がいわば新しい古典の地位を獲得すると、そこに見える地名の多くは、白居易の人物と生涯を連想させる、和歌で言う「歌枕」的作用を持ったものになってくる。なかでも、杭州西部に広がる西湖(銭塘湖)とその周辺の景物は、彼によって繰り返し歌われ、日本の漢詩文学作品にも取り込まれていった。

一方、鎌倉後期から始まる五山文学においてはどうか。平安時代の白居易に匹敵するアイドルは蘇軾(蘇東坡)である。蘇軾自身、人生においても詩作においても白居易を意識していたこともあり、彼の作品には白居易ゆかりの地名が多く見られる。また、今回中心的に取り上げる西湖については、林逋(林和靖)の存在も大きい。当然ながら、五山僧たちは彼らの作品に大きな影響を

(以下(新訳))として改稿されるが、今回考えてみたいのは、その移行の過程で、何がどのように転換されたのかである。見逃せない問題として、二つの時局がある。戦前という「現代」を背負った訳が(旧訳)で、戦後という「現代」を背負っているのが(新訳)だという構図を描くことはたやすい。実際に、(旧訳)には軍部への配慮が働いている。藤壺との関係や冷泉帝の出生を曖昧にし、太上天皇に准じられた光源氏の処遇を醜化するなど、様々な操作が認められる。ただし一方では、「完全」な「翻訳」を謳う(新訳)ですらも、今後米国の影響を受けて大衆化してゆくであろうわが国の商業主義的発想から自由でなかった事実は、既に指摘のあることでもある。つまり、(旧訳)にせよ、(新訳)にせよ、「移植」された時代の風潮と無縁ではいられなかったと言える。

ただし、谷崎の訳文が時流への迎合に甘んじていたと考えるのは、早計である。(旧訳)には本当に、軍部の忌避する事柄が描かれていないのか。(新訳)には本当に、(旧訳)の面影が残っていないのか。平成十八年に國學院大學に寄贈された(新訳)草稿をふまえながら、谷崎が時流に対してどのようにおもねり、一方で何を守ったかを、明らかにする。

【研究発表／A会場・午前】

大塚楠緒子の『露』が語った〈幸せ〉

— 学問する明治女学生のあり方

名古屋大学大学院生 韓 韓

明治三十二年の高等女学校令の施行以降、女学校の創立によって「女学生」が誕生してきた。女学生は、明治の知識人の説く「男女交際」や「自由結婚」を実践する女性として期待される一方で、男を誘惑する「墮落」した女性として批判の対象となる。精神と肉体という二項対立の言説の中に巻き込まれた女学生像が文学作品の中に登場してくる。その中で、明治四十一年の萬朝報に連載された大塚楠緒子の『露』は、女学校卒業後の女性のあり方を追求する女学生の姿を描いている。

女学校を卒業した二人の主人公は、それぞれ実家に帰りたいという理由があつて同学校の研究科に留まつている。主人公鈴音は、自由結婚という理想をあきらめて親が決めた相手との結婚を最終的に選び取る。鈴音同様に自由結婚という理想を抱いているが彼女とは正反対の立場にある、もう一人の主人公鎮子は、理想を果たせずに最終的には自殺してしまう。この作品は、二人の女主人公のあり方を通して女性の〈幸せ〉とは何かという疑問を終始一貫して問いかけている。

いうまでもなく明治の女学校の教育理念は良妻賢母を育成することである。『露』の中でも良妻賢母となつて家庭の中で男性の庇護下に留まることが女性の〈幸せ〉であるとして規定されている。しかしながら、女学生は女学校では自由結婚という理想を追求する主体であり、また精神的な自立を促されている。『露』は、

先行研究が右のような問いに対する答えを見出せなかった理由として、不知庵の文学観にばかり目をむけ、評論に仕組まれた「手法」とその「反応」に注意を払ってこなかったことが考えられる。そこで本発表は、処女評論「山田美妙大人の小説」をこれら二つの観点から考察することを目的とする。その「手法」とは、美妙の出世作「武蔵野」の世界を典拠にして、文学界を乱世の戦場（小説改良）に、そこに颯爽と登場した馬上の若武者（小説改良家）を美妙、そのなかの雑兵を不知庵になぞらえるという「見立て」の技法だ。この「見立て」の観点から分析することによって立ちあらわれるのは、世評が作り上げる小説家美妙の空疎さを剔抉し、改めて小説の本義（意味と姿勢）を説く「雑兵」不知庵の批評性である。発表では、当時この書簡（評論）に最も敏感に反応した尾崎紅葉と、不知庵の慧眼を認めた山田美妙の返答に触れつつ、美妙が不知庵の批評力を認め、不知庵に執筆の場を与えていたことも指摘してみたい。

【研究発表／A会場・午前】

三ヶ島霞子の女教師時代

昭和女子大学特別研究員 高橋 美織

本発表は、当時の女教師をめぐる状況を踏まえながら、三ヶ島霞子の女教師時代を取り上げ、霞子の歌人としての人生における、この時期の位置づけを目的とする。

「青鞥」が文芸的な雑誌から思想的な雑誌に変貌していく中で、

高等教育を受けた女性が内包するこのような問題を提示している。本論は、『露』に描き出された学問する女性が女学校卒業後の身の振り方という現実問題を考察することによって、明治の女学校が女学生にとって如何なる意味を持つているのかを検討する。

【研究発表／A会場・午前】

「雑兵」の一筋 — 山田美妙『夏木立』と批評家内田不知庵の登場

早稲田大学大学院生 大貫 俊彦

明治二十一年一〇月、山田美妙の『夏木立』を批評した一通の書簡とその掲載によって、無名の一青年がどうして文学界に批評家として登場することができたのだろうか、という事態について、これまでどれほどの言及があつただろうか。

従来、内田魯庵の四〇年近くにわたる執筆生活のスタートとなるこの評論は、坪内逍遙の影響下にあつた文学観の指摘や、すでに評論家として活躍していた石橋忍月の「マジメ批評」に対して、「諷刺の娛しみ」を持つていた（野村喬氏）などの表面的な批評姿勢に関する比較など、批評家として認められた時点から遡って捉えるものがほとんどであり、また、登場した背景についても忍月が退いた後の『女学雑誌』の批評欄に不知庵が収まったという状況が説明されるばかりである。しかし、これではどうしてこの評論が認められ、文学界に登場するきっかけとなりえたのかを説明したことにはならない。

短歌欄の縮小や休載はあつたものの、最後まで創刊当時と変わらない恋歌を中心とした歌を掲載し続けた点については、かつて拙稿に論及したことがある。その歌人たちの中で、出詠数が最多であつたのは、新詩社出身の三ヶ島霞子であつた。五六名の歌人が出詠し、全部で三〇八五首の歌が掲載されたが、霞子はその三分の一ほどにあたる一〇一六首を、創刊二年目の一九一二（明治四五）年の三号から、休刊前の最後の年である一九一六（大正五）年の二号まで発表し続けており、その旺盛な歌作は他の歌人たちを圧倒していた。

当時、明治中期以降の就学率の上昇に伴い、女性の小学校教員もまた増加していたが、その女教師の中に、霞子も含まれていた。そして当時の多くの女教師と同様に、校長の無理解や多忙な生活に悩みつつ、日を送つていたということが日記にも遺されている。女教師時代、現実から逃げるように恋愛歌を詠み続けた霞子であつたが、出産という現実の大きさには、空想の入る余地はなかった。むしろ、わが子の愛らしさを残したいという一面もあつただろうが、家事や育児で多忙を極める中、空想の世界にはばたけず、身近にいる子の姿を詠むことが唯一の道であつたと推察できるのではないだろうか。そして、この「現実をありのままに詠う」という手法が、新詩社からアララギへ足を踏み入れることにつながつていくのではないか。

霞子の約六年間の教員生活は、目に見える形で作品に表れることはなかったが、子どもたちと生活した中から感じたものは霞子の心に蓄積され、やがて後にわが子みなみを詠むことへの基盤となつたといえる。

【研究発表／B会場・午前】

コモンセンス・ペアレンティングと表現指導

——大学生指導への応用と認知分析をめぐって——

秀明大学助教 市原 乃奈

本発表は、大学生にコモンセンス・ペアレンティング（以下SP）の応用プログラムを指導した際の資料に基づき、特に「効果的な誉め方、注意・助言の仕方」に焦点を当てた分析に関して、日本語学研究の視点から、さらに検討を加えるものである。SPとは、米国で開発された被虐待児の保護者支援プログラムで言葉によって子どもを育てる術を学び、虐待予防と回復を目指すものである。ここでは日本用に改変された神戸少年の町版を用い、学生がコミュニケーションスキルとして役立つ以下を行った。①わかりやすいコミュニケーション（行動の観察と表現）②良い結果・悪い結果③効果的な褒め方④予防的教育法⑤問題行動を正す教育法⑥自分自身をコントロールする教育法⑦怒りのコントロール法。成果を分析するに当たり、SP指導を実施した学生と未実施の学生に対し、⑥の習得度をスピーチに対してコメントを書かせるという方法を取り、そこにどんな要素が表れるか比較した。効果測定の結果からSPを行った学生には、未実施の学生に殆ど見られない認知的共感の記述が含まれる者が多く、この認知的共感こそが効果的な誉め方等の仕方に不可欠な要素であることが明らかとなった。SPは、学生にとっても効果的なプログラムであり、聴衆分析とわかりやすいコミュニケーションを心がけ、交流することで衝突が減少している。

これらの結果は、認知言語学諸関連分野からの最高で精密化で

安楽行品 深入禅定、見十方仏

深き山に心の月し澄みぬれば鏡に四方の悟りをぞ見る『聞書集』15)

西行は、このように詠む一方で「野守の鏡」を以下のように詠む。

花の色を影にうつせば秋の夜の月ぞ野守の鏡なりける『山家心中集』202)

「花の色」を水面に映す月こそ「野守の鏡」なのだという。これは、「月」が「人の心のうち」に喚起する「花の色」も照らすからである。

この二首は、月を「鏡」に擬す点で共通するが、「鏡」に映るものは仏教的理解からすれば「悟り」の脱俗性（「空諦」と「花の色」の世俗性）「仮諦」という相反するものである。しかし、西行はこのどちらか一方ではなく双方を含む「心のうち」を捉えようとする。これは、『法華経』の実践論『摩訶止観』によれば（中諦）の態度だと言えよう。

歌語「野守の鏡」は、先の『俊頼髓脳』では恋情を詠んだ古歌「はし鷹の野守の鏡得てしがな思ひ思はずよそながら見む」を理解するため注釈されるのであり、ここには仏教的理解は及んでいない。しかし、西行はこの恋情表現を釈教歌に応用したと考えるべきで、そのことによって（仮諦）（空諦）双方を映し出すものとして「鏡」を規定するのである。

以上のことから、結論として西行が「鏡」を通して捉えようとしたものは、（空諦）（仮諦）の二項対立を越えた（中諦）において和歌を詠む態度であることを指摘したい。

きる。わかりやすいコミュニケーションでは、親が子に向かう場合、代名詞で指示するか名を呼ぶかなどによっても効果が異なる。「ですね」「だよね」等を用いるかでも同様である。明治の言文一致体以来の差のようにいつもと違う響きは聴き慣れている方と正反対の印象を持つ。言語的に考えると「丁寧体」による聞き手／話し手の距離感等に関連し、文化の差ともいえる。また、情報量のバランス、場面論や距離の取り方とも関係深い。今後SPの精密化・有効化については、まだまだ言語論・日本語論の成果をも取り入れて進めていく余地がある。

【研究発表／B会場・午前】

西行と鏡の歌 —— 「人の心のうち」を捉えること ——

國學院大学兼任講師 荒木 優也

本発表では、西行が「鏡」を詠むことによって何を捉えようとしたかを考察する。

鏡が真実の姿を現すという信仰は広く見られるものであり、和歌の世界においても水鏡である「野守の鏡」を「人の心のうちを透らせる鏡」（『俊頼髓脳』）とする考えが知られるところである。次に挙げる西行「法華経廿八品歌」の一首は、「野守の鏡」ではなく、「心の月」を「鏡」に擬すものだが、その「鏡」には「十方仏」の「心のうち」の「悟り」が余所ながら見えるといふ。

【研究発表／B会場・午前】

『古今和歌六帖』萬葉歌の再評価

東洋大学大学院生 池原 陽斉

本発表では、『萬葉集』諸本の加点と、平安中期、十世紀後半に成立したと目される類題和歌集『古今和歌六帖』の萬葉歌とを比較検討する。

六帖萬葉歌については、論者によって出入りはあるが、総歌数約四千五百首のうち、四分の一を超える約千二百首がこれに相当するとみなされている。かなり多数の萬葉歌をふくみ、かつ天曆古点に接近する時代の歌集である。さらに、平安時代の萬葉写本がとぼしいことも手伝って、この時代における萬葉訓読と、萬葉歌の流布とを考えるうえでは、欠かすことのできない資料といっている。

その六帖萬葉歌の性格については、山田孝雄、上田英夫らが萬葉古点をつたえるものと解したのに対して、大久保正は多数の伝承歌が混入していることを想定した。この大久保説によって、六帖萬葉歌の性格については、萬葉からの直接採取と伝誦歌の流入という二種の流れを想定することが通説となっている。

一方で、近時小川靖彦は六帖萬葉歌について『萬葉集』のテキストを（訓む）こと……に由来するもの」とのべ、伝誦歌としてではなく、萬葉を独自に訓読した成果とみるべき可能性を示唆している。

以上のように六帖萬葉歌の性格については、いくつかの見解が提示され、通説にも疑義が呈されている。そこで本発表では、現存する萬葉諸本、とくに次点本の訓と六帖萬葉歌とを比較検討し、

両者の距離を具体的に検討したい。

とくに、現存萬葉諸本の訓と『六帖』とのあいだに乖離があることはよく取りあげられる点で、この点は六帖萬葉歌の伝誦性という問題に直結される場合が多い。

しかし、六帖萬葉歌は次点本と重なる場合も多い。また、乖離がある場合でも、誤写を想定すべき例、現存萬葉諸本側に問題があることを考えるべき例もある。このような事情を加味して、萬葉加點史と六帖萬葉歌とがかならずしも縁遠くないことを論じ、六帖萬葉歌を、萬葉加點の古層を明らかにする材料として位置づける。

【研究発表／A会場・午後】 謝六逸の記した平安朝と物語文学

明治大学兼任講師 西野入篤男

本発表では、中国に最も早く体系的な日本文学史を紹介した謝六逸の著作と、それに関わる業績を分析し、日本の平安朝文学がどのような認識のもとで紹介され、またそこにはいかなる問題が孕まれているのかを考えていく。

従来、中国における日本古典文学作品の受容に関わる問題は、翻訳の紹介・分析が集中的に行われてきた。そこでは日中両国の文化的差異による誤訳の指摘のほか、そうした差異を乗り越えるための訳者の工夫や、和歌や敬語の訳出方法が中心的に考察されている。ただし、翻訳出版以前に日本古典文学作品が中国で紹介

【研究発表／A会場・午後】 母に添臥す落葉の宮

國學院大學兼任講師 津島 昭宏

『源氏物語』「夕霧」巻において、朱雀院の女二の宮たる落葉の宮は、いままで自分の生き方を筋道づけてきた母一条御息所の死に際し、その亡骸に「添ひ臥す」という行動に出る。一般に死者へと身を近づけることは、穢れに触れる不吉な行為であると考えられ、実際に周りの女房からも制止の声が聞こえてくるが、こうした動作を落葉の宮がとる理由とはいったい何だろう。嘆きの深さにもとづく感情的な行為とも解せようが、本発表ではより積極的な意味を提示してみたい。

名詞形も含め、『源氏物語』には「添ふ臥す」の語を二十六例確かめることができるが、そのほとんどは物に「添ひ臥す」例であったり、男女間で見られる「添ひ臥す」例であったりする。研究史的には、「添ひ臥す」の語義を確かめるものや、東宮・皇子らの元服時に女性が共寝する「添臥」が注目されてきたが、ここで見るような死者に「添ひ臥す」ことについてはあまり問題にされてこなかったように思う。他作品の用例や民俗学的な知見等を参照しながら、結論としてそれが、死者と生者とのかいかに交わされる、招魂蘇生の呪術的意義を有していたのだと捉えたい。

夫である柏木の死後、落葉の宮はふたたび身の処し方について考えざるをえなくなる。新たに懸想される夕霧との関係は皇女として生きる彼女を苦しめていくが、そうしたなか迎えるのが母の死である。しばしば落葉の宮と母との関係は問題にされるが、「添ひ臥す」という表現を手がかりとして母娘の関係性を位置づけ直

されていることはあまり知られていないのではないかと。各国語の翻訳を通じて世界に広がる日本古典文学作品受容の様相を、翻訳と原文の突き合わせのみではなく、史的変遷の中に位置づけ、より多角的に分析する視座を確保したい。そうした目的の取り組みとして本発表では、一九二九年に中国で初めて日本文学史を紹介した謝六逸『日本文学史』（上下・上海北新書店）の平安期の解説を対象に、彼の古典理解に分析を加えていく。謝六逸（一八九八年—一九四五）は一九一八年に公費留学生として来日し、翌年に早稲田大学に入学。留学当時から、欧米及び日本の文芸の翻訳に取り組んだ人物であり、帰国後は上海大学など複数の大学で教鞭を執っている。彼の記した『日本文学史』は、上代から昭和初期までの作家・作品を幅広く取り扱った、非常に系統的組織的な文学史の紹介である。当時の日本の研究成果を閲読しながら編まれた書であり、近・現代に中国から日本へ留学した人々が、どのような書物により日本文学を理解しようとしたのか、その一端が窺える興味深い資料でもある。後に行われる日本古典文学作品の紹介や翻訳、研究に影響を与えたであろう彼の業績を分析し、主に「受容史」という視点で捉えられてきた日本古典文学作品と中国の関係性を「交流史」として捉え直すための視野を開拓してみたい。

すことができればと思う。「添ひ臥す」とともに、「臥しまろぶ」という行為や塗籠に籠もる意義なども合わせて検討しながら、皇女落葉の宮の造型を考えてみたい。

【研究発表／A会場・午後】 『伊勢物語』「うつのやまべ」のストラテジー

二松學舎大学准教授 原由 来恵

定家本系統『伊勢物語』九段は、詞章と和歌の関係、屏風歌との関わり、史実を背景にした読解、漢文世界との関係を踏まえた解釈など、成果のみられる章段である。しかし改めてこの章段について、言語遊戯という言葉と表現の問題から、読み解きの一提示をはかりたい。

九段はいまでもなく、三河国から駿河国そして武蔵国と東下りの道程が描かれる。その道行きには、都との距離のみならず心情と背景にも都との対比が見受けられる。その中でも中間部の駿河国「うつのやまべ」のプロットは、より都と東の対比を明確化させる位置づけにあるという私見を持つ。

そこで本発表では、「うつのやまべ」場面において、歌の詠まれる経緯とその歌に纏わる言語遊戯が巧まれていることに着目し、「うつのやまべ」のプロットに見られる

- ① 明暗
- ② 昼夜

③男女

という二つの視点から、都との対比化を強調させるためのストラテジーについて読み解く。

【研究発表／B会場・午後】
『古事記』の「三色の奇虫」の解釈

國學院大學兼任講師 山崎 かおり

本発表では、『古事記』の仁徳天皇条における「三色の奇虫」の解釈を試みる。この虫は、大后天の天皇に対する反抗心を否定し、かつ天皇の山代への行幸を導くものであり、「奴理能美之所養虫、一度為_レ匍虫、一度為_レ殼、一度為_レ飛鳥、有_下変_二三色_一之奇虫」と説明される。ここで虫の種類は明示されないが、蚕が幼虫・繭・蛾と変化することを示しているとする通説に従うべきであろう。

ところで、この部分は諸本間で文字の異同が甚だしい。まず「飛鳥」を、兼永筆本は「非虫」とする。これについては、「蜚」と「飛」が同じ意であることから、「蜚鳥」か「飛鳥」を原形とすべきであろう。蛾の状態を示したもので、「匍虫」が幼虫を示すのと対照的である。這う虫と飛ぶ鳥の組み合わせは『延喜式』祝詞や継体紀にみられる。

さて、問題なのは「殼」である。本居宣長以来、多くの注釈書がこの「殼」の字を採用するが、写本には「穀」の異体字か「鼓」

かに言える。ここでの「般若験記」は唐・孟献忠撰述の『金剛般若集験記』であることが研究史の上で言われている。

『日本霊異記』の撰述者景戒が『金剛般若集験記』を真見している論拠は、中巻第二十四縁の「大唐の徳玄」の記述にある。これが『金剛般若集験記』巻上、救護篇所収の寶徳玄説話に該当すると見られている。現在の研究史では、『金剛般若集験記』と『日本霊異記』との関係はそれ以上の進展を見せていないのが現状である。

『日本霊異記』下巻第二十四縁は、いわゆる神身離脱説話であるが、その成立に影響を与えた可能性がある伝承として、中国の宮亭湖廟神説話（『弁正論』『幽明録』『高僧伝』など）が寺川眞知夫氏によって指摘されている。これは、いわゆる「神仏習合」思想が日本独自のものではなく、中国にその先蹤があったことを論じたもので、その後、吉田一彦氏・北條勝貴氏等の論考により、考察が深められていった。

管見では、『金剛般若集験記』神力篇に二話、「宮亭湖神」の説話が見られ、それは従来紹介されている宮亭湖廟神説話とは異なる展開を見せており、この（中国における）宮亭湖神説話群の多様な広がりを見出すものになっている。景戒が『金剛般若集験記』を全編にわたって読んでいたとしたら、「宮亭湖神」説話に目を向け、その影響を受けた可能性もあるのではないか。それらの可能性を踏まえるならば、どのような『日本霊異記』研究の展望が開けてくるのか考察したい。

の字が書かれている。真福寺本における「穀」の異体字を本文として採用し、ここで蚕と穀が重ね合わされているとすると、興味深いことが指摘できる。それは、蚕と穀物（農業）に密接な関わりがあるということである。例えば、記紀の大宜津比売神、稚産靈、保食神という穀物神の体に、蚕と穀物が同時に出現している。また、継体紀には「帝王躬耕、而勸_二農業_一、后妃親蠶、而勉_二桑序_一」とあり、農業は天皇、養蚕は皇后の職掌とされる。よってこの虫は物語において、仲違いした天皇と大后天を再び結びつけるものとして機能しているのではないだろうか。また、古代には穀物の霊魂が鳥に変化する信仰が根強くあった。当該箇所では、「穀」が「飛ぶ鳥」に変化することに意味があり、それを「奇」と評したと考えられる。

以上のように、本発表では、まず「三色の奇虫」を説明する文の校異に注目し、その上で、この虫の果たした役割について文脈をふまえながら考察していく。

【研究発表／B会場・午後】
『金剛般若集験記』から見た『日本霊異記』

大東文化大学准教授 山口 敦史

『日本霊異記』の上巻序文には、「昔漢地にして冥報記を造り、大唐国にして般若験記を作りき。何ぞ、唯し他国の傳録をのみ慎みて、自土の奇事を信じ恐りざらむや」とあるように、中国の典籍『冥報記』に加えて「般若験記」の存在を知っていたことは確

【研究発表／B会場・午後】

古代における浦島伝説の位相

——万葉集歌の水江浦島子を中心に——

苫小牧駒澤大学教授 林 晃平

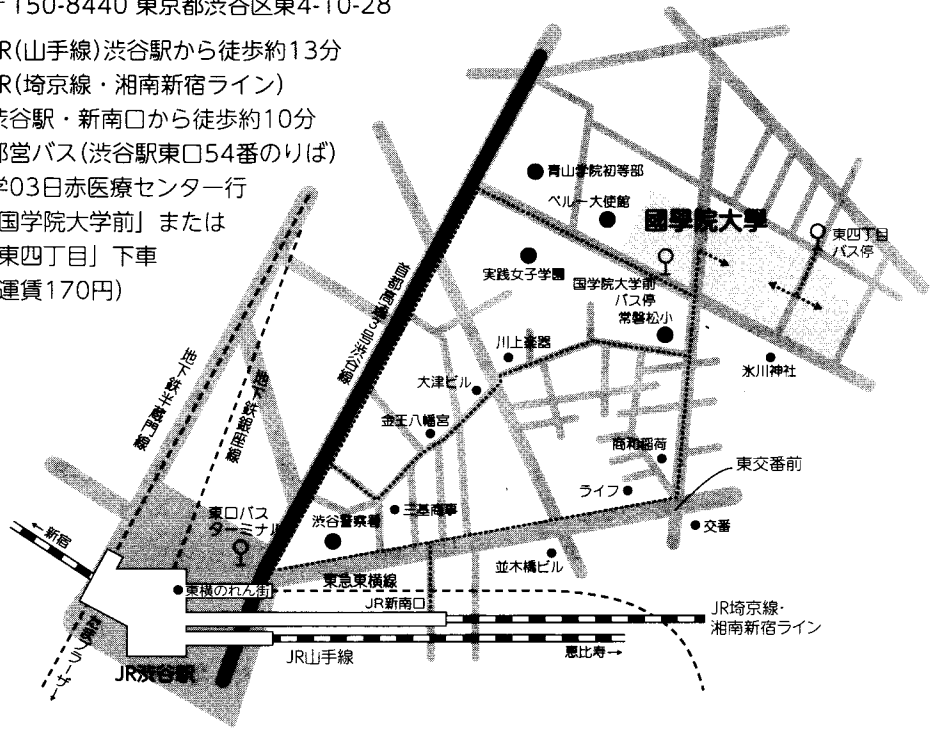
万葉集・巻九所載の「水江之浦嶋子」を詠んだ歌には、古来いくつかの問題が残されている。その一つ、亀が登場しないことである。今日の視点で見れば伝説のディテールの根幹に関わるものがある。古代においては、亀を釣り上げ、その亀が船中において女に変身し、浦島子を神仙世界に誘う。この手続きを欠落させる亀の不在をどうとらえるかは、その後の浦島伝説の展開を考える上でも避けて通れない問題である。しかし、これをどちらが始原か、また何がどう潤色されたのかと、どちらかに正当性をもたせてとらえるのではなく、これらを一つの異伝として、稿者は考えた。伝承には異同や変化はつきものであり、それらを広く見通して問題をとらえる必要がある。丹後国風土記（逸文）との大きな隔たりも、その記事が神仙思想を踏まえた表現の一つと見るべきであり、同時に異伝の多くあったことは「所謂水江浦島子」と風土記が記すことから推測できる。所謂水江浦島子とは、そうした各地の異伝の集合体を念頭に置いた謂いである。その海人族の伝承が、都において話題となっていく過程を見すえ、相対化しつつ、万葉集の虫麻呂歌の表現を読み解く。浦島子が鯉を釣り鯛を釣って海界を越えた、と虫麻呂は表現している。だが釣好きの幸田露伴は、鯛と鯉が同時に釣れる所はないという。しかし、丹後半島では近年まで両方の漁獲があった。また、実は大阪でも明治までそれは可能であった。鯛も鯉も万葉集では当該長歌以外に歌

案内図

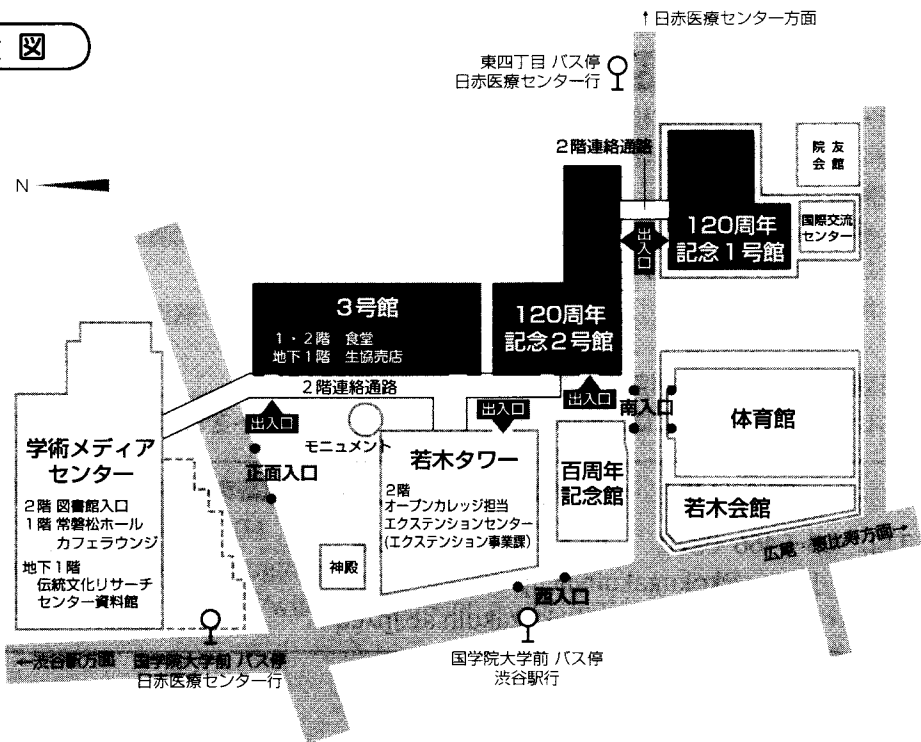
所在地 ●〒150-8440 東京都渋谷区東4-10-28

交通アクセス ●JR(山手線)渋谷駅から徒歩約13分

- JR(埼京線・湘南新宿ライン)
渋谷駅・新南口から徒歩約10分
- 都営バス(渋谷駅東口54番のりば)
学03日赤医療センター行
「国学院大学前」または
「東四丁目」下車
(運賃170円)



配置図



語としては見られない。ゆえにこれを在地取材の反映と見ることも可能だ。だが、それより歌を具体化させ、実体化させるための漁撈の象徴として表現されたものと見るべきである。また、その特異な出会いの方法と亀の不在も、海神信仰と常世を念頭に置くべきであろう。「おそやこの君」と反歌で浦島をけなすことを含め、この和歌には作者の感情の吐露が見られる。虫麻呂の和歌は彼独自の視点で表現された浦島伝説の異伝の一つと見るべきなのである。

**【研究発表／B会場・午後】
小正月の炉端の行事とイザナキ・イザナミの神話**

青山学院大学名誉教授 安田 尚道

小正月(一月十五日)には色々な行事が行われるが、ここで取り上げるのは、A裸回りと、B粥の唱え言。A「裸回り」とは、「十五日夜、夫婦が全裸で、男女の性器の様を象徴し豊作を予祝する」粟穂も稗穂もこの通り」「割れた、割れた、実入って割れた」といった唱え言を唱えながら、四つん這いで囲炉裏の回りを三度回る」というもの。百例余りの事例がある。B「粥の唱え言」とは、「十五日の朝、粥を煮る際に、粥を棒でかき回しながら、「山になれ、川になれ、海になれ、陸になれ」と、国土生成を祈願する唱え言」。のところが十数例の事例しかなく、民俗学者にもあまり知られていない。

『古事記』によると、①男神イザナキ・女神イザナミの二神が

矛で海水を掻き回し引き上げたところ、滴が積もってオノゴロ島ができた。二神はこの島に天御柱を建て八尋殿を建てた。②女神と男神は自分の体について、「成り合わない所」と「成り余った所」があることを確認して、交わる。生まれたのは島々で、最初が淡路島、次に四国、次に……。

小正月の行事A Bがそれぞれ記紀のイザナキ・イザナミの神話(結婚と国生み)と似ていることは既に指摘されているが、A Bを一体のものとして捉えた人は少ない。しかし、本来は、「朝、大地・国土の確立を祈願し、夜、そこでの穀物の豊作を予祝する」というものではなかったか。記紀の神話との関連性は明らかだと思いが、そっくり同じ、というわけではないから、小正月の行事は書物としての記紀に基づくのではなく、「原初の海を掻き回すことにより大地・国土ができ、そこで男神・女神が性器の様を確かめてから交わることにより、この世が始まった」という神話伝承が記紀成立以前にあり、それが元となって、一方では記紀の神話となり、一方では、粟・稗の予祝儀礼となったものであろう。